

提出日： 2025 年 6 月 24 日

研究促進期間制度 研究実績報告書

所属学部・研究科	身分	氏名
法学部	准教授	谷口博史

研究期間	以下1～4より、取得した研究機関を選択し、該当番号を右欄にご記入ください。	
	1. 2024年4月 1日 ～ 2025年3月31日	1
	2. 2024年9月 1日 ～ 2025年8月31日	
	3. 2024年4月 1日 ～ 2024年9月20日	
	4. 2024年9月21日 ～ 2025年3月31日	
活動報告	研究期間中に実施した研究活動を具体的にご記入ください。 海外活動補助費を受給した方は、海外活動の内容が分かるようにご記入ください。	
	研究活動は以下の3つの時期に分けて行われた。 (1) 4月～10月：20世紀を代表するフランスの思想家であり歴史家であるミシェル・フーコー (Michel Foucault 1926-1984) の著作のうちから、主要なものとして『古典主義時代における狂気の歴史』 <i>Histoire de la folie à l'âge classique</i> , 『臨床医学の誕生』 <i>Naissance de la clinique</i> , 『言葉と物』 <i>Les Mots et les choses</i> , 『知の考古学』 <i>L'Archéologie du savoir</i> , 『監視と刑罰』 <i>Surveiller et punir</i> , 『セクシュアリティの歴史』 <i>Histoire de la sexualité</i> を選びだし、それと共に1970年から1984年まではほぼ毎年開講されたコレージュ・ド・フランスの講義録 (<i>Cours au Collège de France</i>) 13巻を通読して、フーコーの方法の変遷をあらためて通時的にたどることをこころみた。 (2) 11月～2月：約半年間の作業を経てあらためて確認されたのは、フーコーの実質的な出発点の書である <i>Histoire de la folie à l'âge classique</i> の重要性である。この書は、その知名度の高さにもかかわらず、イメージばかりが先行して、意外なまでに実質的な読解が乏しいのではないかと思われ、当初の予定通りではあるのだが、以後の研究活動の大半をこの書物に集中させることにした。その際、参照軸のひとつとしてジャック・デリダ (1930 - 2004) の初期の著作群を使用した。ある意味ではきわめて厳格な哲学者であるデリダは個別的な歴史研究にほとんど関心を示すことはなかったが、それでもフッサールの現象学を出発点とするその思想形成において、歴史概念はまちがいに格別な重要性を有していたのであり、その独自の概念を起点にして、デリダはフーコーの方法論に対して、もっとも厳しい批判を投げかけた人物である。このデリダの批判がどのくらい有効なものかを検証しながら、 <i>Histoire de la folie à l'âge classique</i> をあらためて分析することをこころみた。 (3) 3月：以上の研究活動の成果として、 <i>Histoire de la folie à l'âge classique</i> に対するデリダの批判を、1) 序文の問題、2) デカルト解釈の2点にしぼって検証し、それによってフーコーの出発点のさらなる理解に資するための論文の執筆に着手した。	
	得られた	上記の研究活動の結果、得られた研究成果についてご記入ください。

研究成果について	2022年に私は、ジャック・デリダの <i>L'Écriture et la différence</i> という論文集を翻訳刊行する機会に恵まれ、その際に当然のことながら、同書に含まれるフーコー論のテキストを何度も熟読することになったのだが、どうしても腑に落ちない点がいくつか残ってしまった。それを解消するためには、もう一度フーコーの <i>Histoire de la folie à l'âge classique</i> をきちんと読み直さなければならぬと考えながらも、きわめて複雑で、なおかつ大部の著作であるためなかなかその時間を取れずにいたところ、今回、特別研究期間が認められ、その作業に充てる時間を確保することができた。したがって、数年前の翻訳の作業の際に生れたいくつかの違和感が今回の一連の研究の出発点といえるだろう。じっさい <i>Histoire de la folie à l'âge classique</i> のみならず、他の著作もあらためて通時的に読み直す機会が得られたおかげで、違和感の正体をほぼ突き止めることができたと思う。いくつか論点はあるが、そのもっとも大きなものとしては、やはり「序文」の問題を挙げるべきであろう。デリダはほとんどフーコーの書物の本文に触れることなく、「序文」をもとにして批判を組み立てていた。その際に浮上してくるのは、範例性的問題である。あるいは一般化の問題といってもよい。たとえば、なぜ古典主義時代（17－18世紀）なのか。古典主義時代に与えられる範例としての価値ないし特権は何にもとづくのか。こうした問いがデリダの鋭い批判の中核をなしている。たしかに、この「序文」にかんしては、デリダだけでなく多くの論者たちが、きわめてユニークな仕方ですら狂気の歴史を探究するこの書物全体の方法論を抽出して明確に提示したものであると解しているのだが、子細に検討するなら、この書物の本文と序文の関係はけっして単純なものも単線的なものでもないことがわかる。本文がほぼ徹底して考古学的な視点にもとづいて書かれているのに対して、序文では、狂気の歴史という主題をより一般的な枠組みに組み込もうとする、いわば社会学的な視点が顕著になっている。この視点のずれのようなものが、デリダの批判の限界をかたちづくる。おそらくこうした点が私の違和感の正体なのだが、より具体的な内容に関しては、来年3月に刊行される『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）に掲載する予定である。
今後の計画について	得られた成果を踏まえ、今後どのように研究を発展させる計画か、ご記入ください。 <i>Histoire de la folie à l'âge classique</i> に関する論文を発表したのちには、この延長線上で研究活動をすすめていく予定である。 ミシェル・フーコーが生涯をかけて探究しつづけた問題のひとつとして、異なる領域や異なる階層のさまざまな出来事をどうすれば連結することができるか、という問いをあげることができる。<i>Histoire de la folie à l'âge classique</i> においても、この書における歴史記述が単なる精神医学の学説史や単線的な発展史に化してしまうことを何としてでも回避しようとして、フーコーは歴史的、制度的、経済的、政治的、宗教的、医学的な分析に加えて、哲学、文学、演劇、絵画など多様な領域の出来事を連結させながら、古典主義時代における狂気経験というものを明らかにしようとする。その一方で、こうした多重的な視点を統括するために、時代精神のようなあいまいな抽象概念に頼ることをきびしくおのれに禁じている。こうしてフーコーはより具体的なものの分析にむかい、政治的・司法的な制度よりも、日常の生活をかたちづくる仕組みや手続きの分析を洗練化させていく。フーコーの姿勢に一貫してみられるのは、俯瞰的な視線や安易な一般化の拒絶である。では、包括的な概念に頼らずに、いかにして異なる領域の出来事は連結されるの

	か。もちろん、この問いには、領域そのものの生成という問題が背後から連結されることになるが、いずれにせよ、このような、きわめて興味深いフーコー的分析の手法を明らかにすることを今後の研究計画とする。
--	--